

自己有用感をもち、自他を大切にしている児童を育てる指導の工夫

～組織的な生徒指導の充実を図るサポートカードの作成・活用と気持ちを伝え合う活動を取り入れて～

平成30年度 前橋長期研修研究員 宮沢 竜一

研究の概要

主題設定の理由

協力校児童の実態

- ・「役に立ちたい」「みんなの助けになりたい」と思う児童が多い。
- ・相手の思いを大切にすることを苦手とする児童もあり、トラブルに発展することがある。

教職員の願い

- ・児童理解に積極的に取り組んでいるが、客観的な情報や共有するための資料が欲しい。
- ・生徒指導に対して全職員が組織的に取り組める統一した手立てが欲しい。

第38回教育再生会議

- ・日本の子供たちの「自身の満足度」は諸外国と比べて低い。
- ・「自分は役に立たないと強く感じる」という部分では、諸外国に比べて必ずしも低い方ではない。

新学習指導要領

- ・自己の存在を意識しながら、より良い人間関係を形成していけるようにする。
- ・児童理解を深め、学習指導と関連付けながら生徒指導の充実を図る。

平成30年度まえばし学校教育充実指針

- ・一人一人の状況を的確に見取り、個に応じたきめ細かな対応や支援を心がける。
- ・組織を生かした協働的な生徒指導体制を整える。

研究のねらい

自己有用感をもち、自他を大切にしている児童を育てるために、組織的な生徒指導を図るサポートカードの作成と活用や児童が気持ちを伝え合う活動を取り入れたことの有効性を明らかにする。

研究の見通し

1 組織的な生徒指導

全職員で情報を共有するためのサポートカードの作成・活用により、組織的な生徒指導の充実を図ることができるようになるだろう。

2 気持ちを伝え合う活動

自分の気持ちを伝えたり、他者の気持ちを認めたりする活動を意図的・計画的に行うことにより、児童が自己有用感をもち、自他を大切にしている気持ちを育てることができるようになるだろう。

目指す児童像

【目指す児童像】 自己有用感をもち、自他を大切にしている児童

- 家庭や地域との交流場面**：自分が「大切にされている」ことに触れ、「相手のことを思ったり、考えたりして行動する気持ちの大切さ」に気付く
- 異学年との交流場面**：異学年と交流することで、「自他を大切にしている気持ちや行動の良さ」に気付く
- 学年全体での交流場面**：みんなのために頑張っている人に気付き、感謝の気持ちを出したり、自分もみんなのために何かしようとする
- クラス内や席が隣同士との交流場面**：「してもらったこと」「したこと」について自分の思いを出し、互いの思いを大切にしている良さに気付く
- 児童の実態**
 - ・「役に立ちたい」「みんなの助けになりたい」と思う児童が多い。
 - ・相手の思いを大切にすることを苦手とする児童もあり、トラブルに発展することがある。

基本的な考え方

自己有用感をもち、自他を大切にしている児童とは

【自己有用感】
「他者の存在を前提として自分の存在価値を感じること」
「成就感や誰かから必要とされている満足感」
※子供の社会性が育つ『異年齢の交流活動』
(2011 国立教育政策研究所生徒指導センター)

「互いを認め合い、いつでも、誰に対しても相手のことを思ったり、考えたりして行動することを大切にしている児童」

組織的な生徒指導の充実を図るサポートカードの作成・活用

全教職員がサポートカードの作成に関わり、必要な情報を共有することで、各部会や各学年が連携し、全職員体制で、児童一人一人に応じた対応・支援を行う。

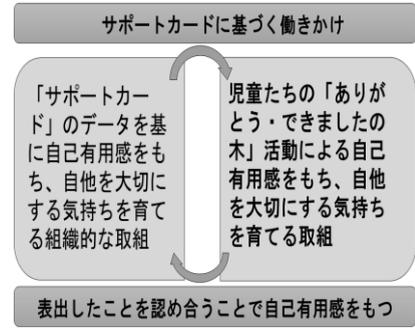


気持ちを伝え合う活動「ありがとう・できましたの木」活動

感謝の表出「ありがとうの葉」と達成の表出「できましたの花」を一つの木に集めて、児童が気持ちを伝えたり、他者の気持ちを認めたりすることを意図的・計画的に行う活動である。環境や場面を段階的に変化させ、繰り返し行うことで、自己有用感をもち、自他を大切にしている思いや行動を育む。なお、相手のことをしっかり見つめて取り組ませるため、活動は、毎週定期的にクラス全体で行う。

サポートカードと「ありがとう・できましたの木」活動の関わり

それぞれの活動は、共に児童が思いを表出したものである。その思いに基づき、児童が互いに認め合ったり、先生に褒められたり、また、職員が支援したりすることを繰り返し継続することで、自己有用感をもち、自他を大切にしている気持ちを育む。



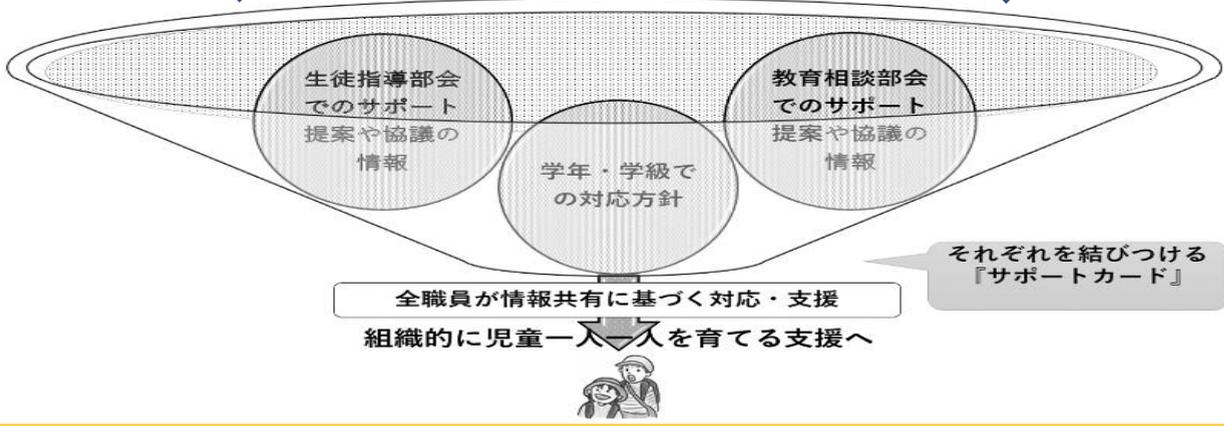
手立て1 「組織的な生徒指導の充実を図るサポートカードの作成・活用」

必要な情報を一枚にまとめたサポートカードを全職員で共有する体制をつくり、チームで児童一人一人に応じた支援を行う

サポートカード作成・活用に向けた勉強会
 全職員の情報共有の手段となるサポートカードの質を高めるため、サポートカードの作成に協力してもらい、さらに活用のスキルアップを図る勉強会を実施した。

サポートカード活用マニュアルによる教職員への支援
 サポートカードの活用に向けて、所見の書き方や事実の捉え方、サポートカードの生かし方などをまとめたマニュアルを用意して教職員をサポートした。

サポートカードを活用した情報共有と支援活動
 サポートカードの情報を、生徒指導部会や教育相談部会、学年部会など、各部会で共有し、全職員が同じ観点で児童に適切な対応・支援を行える体制を整えた。



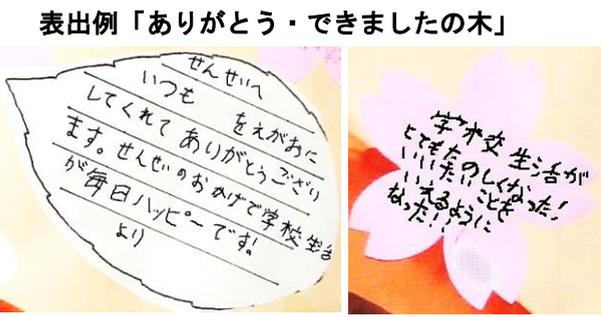
サポートカードを活用した取組で見た表出例

●目指す姿
 サポートカードを活用したきめ細かな対応・支援により、自分は「大事にされている」という気持ちに触れることで自己有用感を持ち、自他を大切にすることが表出してくる。

●活動の様子
 サポートカードと「ありがとう・できましたの木」活動のそれぞれの表出を関連させつつ、各部会との連携を図りながら対応・支援を行った。



●教職員の感想
 普段、問題がないことで、見取りが不足しがちな児童についても、サポートカードを活用したことで、一人一人に気を配ることにつながり、児童の頑張りやよさに気付くことができるようになりました。



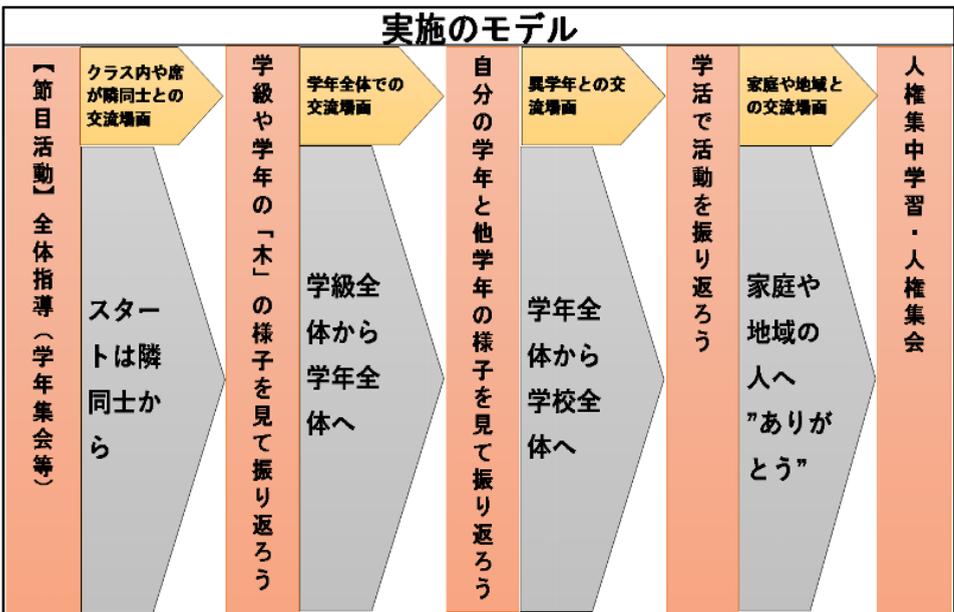
手立て2 「気持ちを伝え合う活動」の実践（抽出学年3・4年生）

「ありがとう・できましたの木」活動を行う（毎週金曜日「帰りの会」に全員で行う）

「ありがとう・できましたの木」活動
 他者からの感謝の表出「ありがとうの葉」と自分の達成の表出「できましたの花」を一つの木に貼って気持ちを伝え合う。

活動を広げる節目活動
 「ありがとう・できましたの木」活動を効果的にするため、学級活動などと連携して行う。

「ありがとう・できましたの木」活動実施マニュアル
 4つの場面で環境を段階的に広げ、自己有用感を持ち、自他を大切にすることを示したものの。



手立て2 「気持ちを伝え合う活動」 (「ありがとうございましたの木」活動)

クラス内や席が隣同士との交流場面

●目指す表出

「してもらったこと」「したこと」「できたこと」など自分の思いを表出し、互いの思いを大切にできる良さに気付く。

●活動の様子

自分の思いを「伝えること」や友達の行動に「気付くこと」の支援を学年で共通理解して取り組んだ。



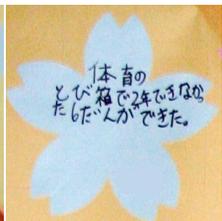
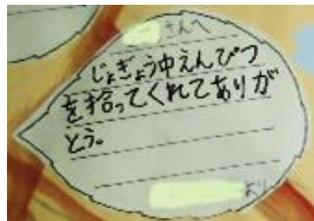
表出例

- ・授業中に鉛筆を拾ってくれてありがとう。
- ・この前は、消しゴムを拾ってくれて、どうもありがとう。
- ・体育の跳び箱で、2年生で、できなかった6段が跳べるようになった。
- ・〇〇君の給食の片付けを手伝えました。

節目活動「学年集会」



学年集会では、「相手に伝えられない気持ちも葉や花で伝えられるといいね」と児童へ投げかけて「ありがとう・できましたの木」活動をスタートさせた。



「してもらったこと」「できたこと」の表出

木の様子

学年全体での交流場面

●目指す表出

みんなのために頑張っている人に気付き、感謝の気持ちを出したり、自分もみんなのために何かしようとする。

●活動の様子

児童の価値観や行動パターンにも広がりが見られ「みんなのために頑張っている行為」や「優しい言葉がけや行動」に対して、感謝の葉や花の表出が見られるようになった。担任も、頑張っている児童の紹介やそれらに関する表出を見せるなど、児童の活動を支援した。



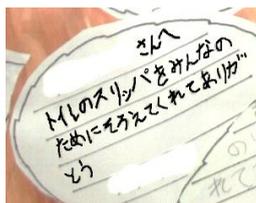
表出例

- ・〇〇さんへ トイレのスリッパをみんなのために、そろえてくれてありがとう。
- ・「字がきれいだね」と言ってくれてありがとうございました。自信ができました。
- ・習字で、紙が無くなってしまった時に、何枚かくれてありがとう。とても助かったよ。今度は、私が渡せるようにがんばるよ。
- ・トイレのスリッパをそろえることができました。

節目活動「学年交流」



学年交流では、他のクラスの木の様子を見たり、葉を貼ったりして、自分の取組や活動への見方や考え方の幅を広げる活動をした。



「できました」に対する「ありがとう」

木の様子

異学年との交流場面

●目指す表出

異学年と交流することで、「自他を大切にできる気持ちや行動の良さ」に気付く。

●活動の様子

異学年の交流は、同学年同士とは、違う考え方や捉え方に触れる機会となり、活動の幅を広げることにつながった。【節目活動】では、学級活動を実施した。「相手のことを思って自分ができること」について話し合い、自分の活動を振り返り、今後の見通しをもたせた。



表出例

- ・【3年生から4年生へ】学童で他の子に嫌なことをされていた時、なぐさめてくれてありがとう。
- ・【4年生から3年生へ】いつも一緒に帰ってくれてありがとう。これからも仲良くしてください。よろしく願います。
- ・【節目活動(振り返りから)】いつでも、だれにでも、相手の気持ちを考えることが、どんなに大切なのが分かりました。

学童で嫌なことをされていた時に、なぐさめてくれてありがとう。これからも仲良くしてください。よろしく願います。

いつでもだれにでも相手の気持ちを考えることが、どんなに大切なのが分かりました。

節目活動「学級活動」相手のことを思って、自分ができることは何か(3・4年共通)



学級活動では、『相手のことを思って、自分ができることは何か』について話し合った。授業の最後に自分の活動目標を「つぼみカード(意思決定)」に記し、木に貼った。目標が成就するとつぼみに「できましたの花」を貼り、達成感を味わった。数日後には、つぼみに花がついていた。(右写真)



「つぼみカード」と花が咲いた様子

木の様子

家庭や地域との交流場面

●目指す表出

自分が「大切にされている」ことに触れ、「相手のことを思ったり、考えたりして行動する気持ちの大切さ」に気付く。

●活動の様子

家庭の協力を得て、児童への応援メッセージ「水滴カード」を「ありがとう・できましたの木」に貼ってもらう活動を行った。「自分は大切にされている」ということに触れられたことで「相手のことを思ったり、考えたりして行動する気持ちの大切さ」に気付く機会となった。親子で嬉しそうに貼ったり、眺めている微笑ましい姿を見かけた。【節目活動】「学年集会」では、気持ちを伝え合う活動のまとめを行った。



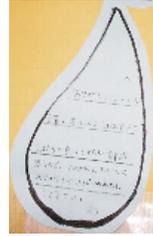
表出例

- ・【家庭から児童へ（水滴カード）】何事も一生懸命頑張る〇〇ちゃんが好きです！お仕事で大変な思いをしても〇〇ちゃん笑顔で元気になります。ママを〇〇ちゃんママにしてくれてありがとう。（抜粋）
- ・【児童の感想（活動後の振り返り）】私は、勉強も運動も頑張っているけれど、私はお母さんの家事をやっている方が立派だと思ふ。
- ・【児童から地域の方へ】いつも学校に行くとき、帰るときにいてくれてありがとう。いてくれると安心します。

節目活動「学年集会」



学年集会では、活動によって、木と共に成長してきた自分自身の姿を振り返り、達成感を味わい合った。また、様々な場面で自他のことを思う気持ちや行動の大切さを集会で確認した。



水滴カード

いつも見まもてくれてい
るんだなあと思いました
お母さんいつもやれているの
は自分でもわかってしまし
たがこんなふうに思っ
てくれてとてもうれいので
これからお母さんばあさん
にしてください。

児童の感想

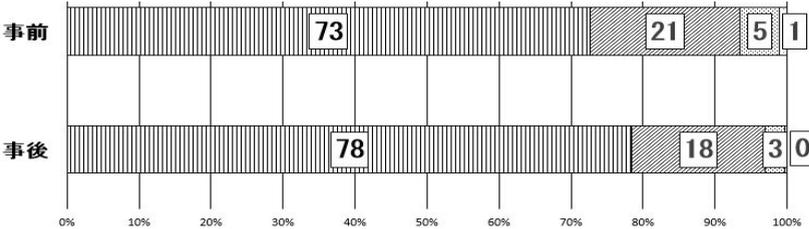


木の様子

研究のまとめ

児童向け事前・事後アンケート結果

先生は私たち一人一人を見て、声をかけたり、褒めてくれたりしています

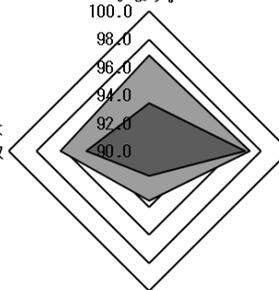


□あてはまる □ややあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない

自己有用感に係る事前・事後アンケート（全校児童対象）

■事後
■事前

先生は私たち一人一人をみて、声をかけてくれたり、ほめてくれたりしています。



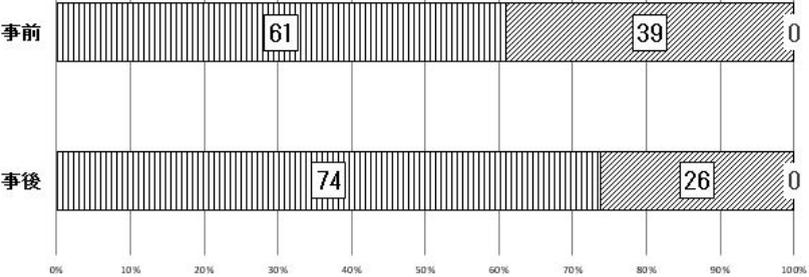
あなたは、係りや当番などを最後までしっかり取り組んでいますか？

あなたは、自分のことや友達のことを大事にしていますか？

あなたは、きまりを守ったり、よく考えたりして行動をしていますか？

教職員向け事前・事後アンケート結果

サポートカードは組織的な生徒指導を行う際の資料として参考になった



□あてはまる □ややあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない

事後アンケート及び児童の表出から

【教職員の感想】（※事後アンケートの記述より）

- ・このような情報共有ができてこそ、子供たちへの有効な支援となり、教員がプロとしての仕事が可能になるように感じた。
- ・これからの組織の在り方を示してくれているかのような取組であったと感じた。など

【児童の表出】（※「ありがとう・できましたの木」から）

- ・「ありがとう・できましたの木」を作ってくれてありがとうございます。気持ちをいっぱい伝えられました。など

成果

- ・サポートカードによる情報の共有は、全職員で児童一人一人への対応・支援に臨む組織的な生徒指導を活性化させ、児童が自己有用感をもつことにつながったと考えられる。
- ・児童のアンケート結果から、サポートカードを活用した対応・支援や「ありがとうできましたの木」活動の関わりは、児童が自己有用感をもつことにつながり、自他を大切にする気持ちを育てることにつながったと考えられる。

課題

- ・常に変化し、定型がない生徒指導にあっては、今後も、常に実態を見据え、全職員が参加する組織的な取組が形骸化しないよう、進めていく必要があると考える。